

かささぎ通信 第69号

2018年 6月 8日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一八年五月の「森三郎の作品を読む会」では、
『森三郎童話選集かささぎ物語』所収の
「わらび餅」を中心に読みました

「わらび餅」は、『赤い鳥』昭和7年7月号初出の作品です。この話についても、「かささぎ通信」第68号で紹介した「お染」と同じく、勝尾金弥氏が「森三郎氏追悼」(『ふるほん西三河』第48号、平成6年8月)の中で話の内容を次のように紹介しています。

「わらび餅」の主人公有明中将は、気の強い奥方のために好物のわらび餅を制限されるが、見知らぬ少女から奥方へのまじないの方法を教えられ、それがうまく成功する。わらび餅に目がない若い公家の人物像が実に鮮明で、それを助ける森の少女が実はわらびの精であったというファンタジー仕立ては西洋風で新鮮味があり、美しい奥方の鼻の先にわらび餅が生えるという展開も巧みで、王朝時代を楽しめる、明るいしゃれた読物になっている。

少女から教わったまじないというのは、「わらびもち、わらびもち、わらびもち」と三べん唱えて、奥方の鼻をちよいとつつくという方法で、中將が教わった通りにしてみると、翌朝には、奥方の鼻にわらび餅がくっついてしまいました。奥方がいくら引つ張ってもとれなくなってしまう。奥方が「何だか鼻がむづがゆいので、手でさはって見たら、へんなものがくっついていて」と言う表現は、芥川龍之介の「鼻」を連想させるといふ感想が、会員の中からも出て来ました。確かに、芥川は、禅智内供の鼻の長さが変化する時「ふと鼻が何時になく、むづ痒いのに気がついた」と表現しています。

「鼻」といえば、「鼻」そのものを題材にして森三郎自身が『赤い鳥』に二作品を発表しています。一つ目は「鼻のはれもの」(名義 山口信)です。「わらび餅」掲載より三か月前の『赤い鳥』昭和7年4月号に発表しています。これは『万葉集』の中の持統天皇とその女官の歌を題材にした話です。女官の鼻の上に小さなおでまきができ、二三日たつとだんだんにはれあがって、「まるでイチゴでもくっつけたやうになり」痛みも激しいので、女官は宿下がりをお願いします(森三郎の作品を読む会通信 第12号 参照)。この話は『源氏物語』の「末摘花」の巻で、源氏が鼻に紅色をつけてみせる場面を思わせます。森三郎が昭和七年当時、『万葉集』『源氏物語』『枕草子』『今昔物語集』などの古典に題材を採って童話を書いていたことはこれまでに分かっています。

「鼻」を題材にしたもう一作品は、題名もずばり「鼻」で、昭和九年十月号の『赤い鳥』に掲載されました。しかも「鼻のはれもの」と同じ「山口信」名義で発表されています。山口信名義の作品は全三作で、そのうち二作が「鼻」を題材にしていることになりました。「鼻」はロシアの 세인트ピーターズブルグへ派遣されたばかりのフランス人士官の話です。極寒の地なので耳も首もしっかり防寒して歩いていると、「ノス」「ノス」と通りがかりの人々が注意し、そのうちに一人の百姓が足元の雪をつかんで士官の鼻を「ごしごしこすりつけました。鼻をむき出しにしていると凍り付いて鼻が落ちてしまうよと、親切心からの行動だったのですが、「ノス」がロシア語の「鼻」の意味だと知らなかった士官はびっくりして助けを求めたという話です。(かささぎ通信)第49号 参照)

「わらび餅」「鼻のはれもの」「鼻」の三作に共通するのは「笑い」です。「わらび餅」ではわらびの精のまじないが解けた後、奥方はわらび餅が好きになり、夫婦の仲もそれはよくなったと、ほんわり終わっています。「明るい笑い」は森三郎の真骨頂ではないかと思われれます。

次回「森三郎の作品を読む会」(第二金曜日)に刈谷市中央図書館で開催

平成30年7月13日(金)午後1時半〜3時半

「梅の木」「新葛の葉ものがたり」(森三郎童話選集かささぎ物語)